

手にとって読まれる広報誌

7つのポイント

読んでもらう工夫をしている県内の地域の広報誌を分析し、手にとって読まれる効果的な広報発信の7つのポイントを説明する。最後には事例コラムも。

Point 1

子どもを含めた地域の人々の関心をひく写真を一面トップに載せる。



事例1 『新市いきいき会だより』(新市いきいき会<雲南市>発行)

読者である地域の人に、手にとってみてもらうことを最大のポイントにし、そのために子どもを含めた地域の人々の関心をひく写真を一面トップに掲載するようにしている。

作り手の満足感と読者の満足感とは同じでないことを認識して、読者の目線で作ることをポイントにしている。自分たちのことが掲載されていると、子どもから高齢者までが発行日を待つ、『新市いきいき会だより』を目指している。

Point 2

タイトルの背景を季節ごとに变えて、新しい印象を与える。



事例2 『中野の里づくりだより』(中野里づくり委員会<雲南市>発行)

タイトルは新聞のようにして、背景は季節ごとに变えることで新しい印象を与える。

また全体で使う色は基本2色をベースとして所々で挿し色を使い、全体的に絞ってみえるようにする。書体もいろいろ使わず、基本の書体を決めて、あとは見出しや記事によって使いわける。

Point 3

高齢者も読みやすいレイアウト。



文字の大きさは12ポイント、難しい漢字を使用しない、わかりやすい文章、写真を入れるなどして、高齢者も読みやすくする。

事例3 『お元気ですか 三瓶公民館です』(三瓶公民館<大田市>発行)

Point 4

企画ものをいれる。



毎月、「おばあちゃんの料理一コマメモ」コーナーを設けている。読者が楽しんでいる企画ものである。企画の立て方次第で地域の広報誌はもっと面白くなる。読んで面白く、制作する側も楽しめ、地域づくりに貢献する企画ものを考える。例えば、読者参加、人物クローズアップ、地域文化の掘りおこし、現場クローズアップ、生活お役立ち情報、教養講座などである。世代間交流を促す企画なども考えるとおもしろい。

事例3 『西日登振興会』(西日登振興会<雲南市>発行)

Point 5

指導・教育・啓発にならないようにする。

見ていて楽しい誌面にする事で、発行を楽しみにしてもらえる。結果、手にとって読んでもらえる。

Point 6

メディアを使いこなす。

facebook やブログと連動させることで、読者の幅を広げることができる。地域外読者の獲得や効率よく広報誌を作成することも可能になる。

さらにプレスリリースなどを作成して、新聞社やケーブルテレビなどに知らせることで、地域の情報がさらに広がる。

Point 7

魅力的な見出しを立て、編集後記をつける。

見出しで記事の内容がわかるようにすること。長すぎず、リズムよく、遊び心を大切にする。制作する側との距離を縮めるためにも、編集後記を書く。

事例コラム①

Column

定住・移住を意識し、あらゆるツールを使って発信。

奥田原交流センター（安来市）

高齢化率などの数字に現れない「地域の良さ」を引き出すために、地元の人を引き込み、活発な活動をする奥田原交流センター。広報誌制作の担当者は同センターの主事であるが、「地域の方に活動内容を知ってほしい、なぜなら自分自身も主事になる前は、どんな行事があるかもわからず、どんな団体が地域内で活動しているのかもわからなかった」と話す。そこで見てもらえるような広報誌を制作することにする。

制作する際に注意することは、①写真を大きく、②カラー誌面、③「裏面続く」をいれる、④見出しをつける、の4点である。

これにより地域住民のいい相乗効果が生

まれたと、担当者は言う。

さらに、地域内外に向けて情報発信をしていることも特筆すべきことである。facebook やブログだけでなく、プレスリリースとチラシをイベント毎地元ケーブルテレビに送り取材してもらうようにしている。このため、地域内外から「よーでちよーね」と言われるようになっていく。担当者は、「待っているだけではダメだと思った。人口も減り、危機感があり、UターンやIターン者を意識した情報発信をして奥田原を知ってもらえないといけないと思った」と話す。

外に出ている地区出身者に地域情報を送付。 つながりの復活や強化に効果。

波多コミュニティ協議会(雲南市掛合町)では、波多出身者に、生まれ育った波多地区の「今」を知ってもらおうと「ふるさと通信」の発行を2013年12月から始めた。

一口2000円で送付希望者を募り、地域の広報誌「はただより」などを毎月郵送しています。評判は上々で、希望者は増えています。現在の波多地区を知ることで、つながりが復活したり、強まったりと、さまざまな効果が見られている。

このような地区外に送付をする場合、ま

波多コミュニティ協議会(雲南市)

ず問題となるのが、地区外へ出ている方の住所の把握だが、波多地区の場合は、旧波多小学校閉校の際に閉校記念アルバムを送付する際の住所を基にしている。

最近では、他市のコミュニティセンターからも取り組みについて相談があり、他地域でも地域外への発信の高さが伺える。



送付内容例

企画の目的と戦略を明確にし、地域内において 積極的な情報提供とPRで情報を共有する。

頓原公民館(飯南町)

頓原公民館(飯南町)と地域が連携し、豊かな自然を活用した「プレーパーク」の創設と「森の恵み講座」を開講したことをきっかけに、地域住民主導で、周辺施設や行政も加わった「とんばらの里山で遊ぶ会」。町民の憩いの場としての活用とともに町外からの来訪者増加につながっているが、この背景には、「公民館単独事業」から「目的や価値を共有する団体との連携事業」としたことがある。日ごろから①地域の課題やニーズにアンテナを張る、②出前講座やフ

レックスタイム講座などを開講し公民館の敷居を低くする、③積極的な情報提供・PR活動、の3点を心がけていた。また、企画の目的と戦略を明確にし、ぶれないということも大切にしていたという。このように地域内において徹底的に情報を共有し、地域住民一人ひとりのモチベーションをアップにつなげるようにしたことが、「プレーパーク」の創設と「森の恵み講座」の発展につながったことは否めない。

奥出雲町9公民館の主事らが集い 市町村の枠を越えて広報誌研修会を自主開催。

奥出雲町にある9つの公民館の主事らは定期的に集まり、主事会を開催している。2013年12月の主事会では広報誌研修会が行われた。当日は、9名の主事に加え、奥出雲町教育委員会から3名の職員が同席して、勉強が進んだ。場所は、雲南市新市交流センターにおいて行われた。内容は、ブログ、facebook、広報誌の連動を上手にしている新市いきいき会事務局の広報誌の取り組みと、広報誌を制作するポイントなどの伝授などである。さらに9つ公民

館で発行している広報誌を研修前に広報

館のプロに見てもらい、当日個別にフィードバックが行われた。最後には今回の研修の振り返りを含めて、研修から感じた「これから広報誌制作に活かしたいこと」を紙に書いてもらい写真撮影で終了。予定時間の1時間はあっという間に過ぎ、熱がこもった研修だった。

市町村の枠を越えて広報誌制作担当者の自主的な横のつながりや勉強ができる場が広がっていることがうかがえた。

6公民館が連携しながら、広報誌を地域づくりに役立てる。

金城自治区公民館（浜田市）

浜田市は市町村合併により、「浜田那賀方式自治区」制度を採用した。浜田市ホームページによると、同自治区制度とは地域のことは地域で解決し、安心を提供するとともに、地域住民の声を反映した「地域の個性を活かしたまちづくり」により、きめ細かなまちづくりを推進し、地域の不安を払拭しつつ、「一体的なまちづくり」によって連帯感を深めていくという新しいまちづくりであると説明している。自治区は浜田、金城、旭、弥栄、三隅の5自治区に分けられている。それぞれ地区公民館を設置し、地域住民の生涯学習の拠点施設となっている。ここでは金城自治区公民館を紹介する。

金城自治区公民館は、雲城、今福、波佐、小国、久佐、美又の6つの公民館が平

成18年度から連携している。連携強化を図るために、館長・主事会議の開催、連携事業の実施、公民館活動の発信を行っている。公民館活動の発信として各館それぞれ公民館だよりを発行しているが、それぞれの主事の持ち味を活かした広報誌の内容となっている。また連携の良さを活かし、主事同士で勉強会や意見交換などをし、お互いが情報共有をしながら、切削琢磨している。

地元の問題を豊富にし、親しみやすい文章や作った人の顔が見える工夫をしながら、広報誌を発行し、地域づくりにつなげているのも特徴である。